

# 『土佐日記』から読み解く和歌発生の契機と限界風景

神山 藍<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 東洋大学 (〒350-8585 埼玉県川越市鯨井2100, E-mail:kamiyama@toyo.jp)

本研究では、『土佐日記』を一種の歌論書として位置づけ、楫取と貫之の対話に着目し、両者の対自然の姿勢から、和歌発生の契機を明らかにし、歌人が歌に表現できない類の風景を探った。その結果、和歌の発生契機としては、文芸的美的理念を前提とする発想、松や鶴など歌に適した題材や画題、歌言葉、形式美があると言える。一方で、以上のような和歌的な関心とは別に、自然との深い身体的交渉から得ることのできる風景の類がある。これは、美に傾倒した知的な関心では捉えることのできない風景であると言える。これを、風景を発見する際の限界と認め、風景の存在を語ることが重要であろう。

キーワード: 土佐日記, 和歌, 限界風景, 航海, 楫取

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景

日本の風景を語る上で、和歌は、自然の風景の存在を発見するための一つの拠り所であり、美の標準であると言える。しかしながら、風景 (Landscape) が有する美的性質へ固執し、美への傾斜、形式美などに執着すると風景の存在を発見する融通自在性に欠け、自然に潜在する風景を発見することの抵抗となることがある。

特に、平安時代以降の和歌は、短歌中心の歌体と特定の宮廷や貴族社会に属する作者が、個人の感情や思想を物や言に託して技巧的に表現する洗練性の発展が著しい反面、一定の技法や形式に捕らわれる和歌も多く、自然の捉え方が類型的な歌が多くなる。

更に、延喜5 (905) 年に勅撰和歌集作成の命が下り、編纂された公的な『古今和歌集』の成立は、和歌の再興および宮廷文学として和歌の確立を深め、その美意識、歌体、表現は、後世の規範とされ、その価値観は、ほぼ固定されたとと言えるだろう。

これに対し、近世では、正岡子規の歌論書『歌詠みに与ふる書<sup>2)</sup>』を嚆矢として和歌の在り方が批判に晒されることもあった。確かに、『古今和歌集』には、上流の重々しさ、心情の汪溢、古人の糟粕が散見されるが、果たして、漢詩からの独立を果たし、国風の大和歌を大成しようとする歌人がこの惰性にそれほど無自覚であったであろうか。

古今和歌集の撰者のひとりに選ばれた紀貫之は、平安

期の代表的な歌人であるとともに、古今和歌集の序文を書いた人物であり、歌人のみならず歌論者としての才覚を持ち合わせた人物でもあった。その紀貫之が、宮中行事や政治的役割とは一線を画して執筆した『土佐日記』には、自身を客観的に描写するとともに、鋭い観察眼によって和歌の在り方が記されている片鱗がある。

### (2) 土佐日記の位置づけと研究の目的

勅撰和歌集の勅命から約30年後の承平5 (935) 年頃に成立したとされる『土佐日記』は、紀貫之が土佐守の任期を終え、承平4 (934) 年12月27日大津から船出し、翌年の2月16日に京都に到着するまでの55日間の海路を綴った旅日記である。日記には、記録的、実録的、忘備的、戯曲的、諧謔的、地理的、文学的な性格が認められるため、その様式についても、日記、物語、紀行文、歌論書など様々な視点からの研究蓄積がある。

#### a) 歌論書としての位置づけ

『土佐日記』には、「白波」を歌った歌には不吉、「磯ぶり」を歌った人には普段歌を歌を作詠しない人、日記に記すこともできない歌など、他者の歌を批判する傾向がある一方、貫之が自作した歌を「この歌は所を見るにえまさらず」「なぞただ言なる」と自己内省的に顧みた側面も指摘できる。ここに、他者への啓蒙的な意図と自己啓発が示されていると言え、他者と自身の無自覚な惰性的価値を脱して、和歌の在り方を更新しようとする作者の意図が見出せる。

『土佐日記』には、貴賤貧富に関わらず、老若男女

が作詠したとされる歌、下手な歌、素人の歌など57首の和歌に加え、舟歌などが記載され、その多くに著者の見解が述べられているため、歌論書としての性格を有するとされる(表-1)。このような性格から、萩谷<sup>2)</sup>は、『土佐日記』を作歌指導書として位置づけ、とりわけ、

表-1 『土佐日記』に記載の和歌

日付	詠人	歌番号	和歌
12/26	主の守	1	都いでゝ君に逢はむとこしものをこしかひもなく別れぬるかな
	前の守	2	しろたへの浪路を遠くゆきかひて我に似べきはたれならぬに
12/27	ある人	3	都へとおもふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり
	ある人	4	あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける
	かの人	5	をしと思ふ人やとまるとあし鴨のうち群れてこそ我はきにけれ
	ゆく人	6	棹させど底ひも知らぬわたつみのふかきこゝろを君に見るかな
1/1		7	九重の門のしりくめ繩のなよしの頭ひゝら木らしいかに
1/7	よき人	8	浅茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつるわかかなりけり
	破籠もたせてきたる人	9	ゆくさきにたつ白浪の聲よりもおくれで泣かむわれやまさらむ
	童	10	ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ
1/8	ある人	11	てる月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとは海にぞ(ぞあい)りける
1/9	船の人	12	おもひやる心は海を渡れどもふみしなけれは知らずやあるらむ
	船人	13	見渡せば松のうれごとにするむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる
1/11	女童	14	まことにて名に聞く所はねならば飛ぶがごとくにみやこへもがな
	人	15	世の中におもひや(あい)れども子を戀ふる思ひにまさる思ひなきかな
1/13		16	雲もみな浪とぞ見ゆる海土もがなれいづれか海と問ひて知るべく
1/15	女の童	17	立てばたつみれば又ある吹く風と浪とは思ふどちにやあるらむ
1/16	ある人	18	霜だにもおかぬかたぞといふなれど浪の中にはゆきぞ降りける
1/17	ある人	19	みなそこの月のうへより漕ぐふねの棹にさはるは桂なるら(ペイ)し
	ある人	20	かげ見れば浪の底なるひさかたの空こぎわたるわれぞさびしき
1/18	ある人	21	いそぶりの寄する磯には年月をいつとも分かぬ雪のみぞふる
	人	22	風による浪のいそにはうぐひすも春もえしらぬ花のみぞ咲く
1/20	翁	23	あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも
	ある人	24	都にてやまのはに見し月なれどなみより出でゝなみにこそ入れ
1/21		25	なほこそ國のかたは見やらるれ、わが父母ありとしおもへば、かへらや
	船君	26	わが髪ゆきといそべのしら浪といづれまされりおきつ島もり

日付	詠人	歌番号	和歌
1/22	男の童	27	漕ぎて行く船にて見ればあしびきの山さへゆくを松は知らずや
	ある人	28	浪とのみひとへに聞けどいづれ見れば雪と花とにまがひけるかな
1/26	女の童	29	わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やまずふかなむ
	淡路の専女	30	追風の吹きぬる時はゆくふねの帆手うちてこそうれしかりけれ
1/27	ある女	31	日をだにもあま雲ちかく見るものを都へとおもふ道のはるけさ
	ある人	32	吹くかぜの絶えぬ限りし立ちくれれば波路はいとどはるけかりけり
1/29	ある女	33	おぼつかなけふは子の日かあまならば海松をだに引かましものを
	ある人	34	けふなれど若菜もつまず春日野のわがこぎわたる浦になければ
	女※	35	年ごろをすみし所の名にしおへばきよる浪をもあはれとぞ見る
1/30	ある人	36	玉くしげ箱のうらなみたゝぬ日は海をかゞみとたれか見ざらむ
2/1	船君	37	ひく船の綱手のながき春の日をよそかゝかまでわれはへにけり
2/3		38	緒をよりにてかひなきものは落ちつる涙の玉をぬかぬなりけり
2/4	船なる人	39	よする浪うちも寄せなむわが戀ふる人わすれ貝おりてひろはむ
	ある人	40	わすれ貝ひろひしもせじ白玉を戀ふるをだにもかたみと思はむ
	ある女	41	手をひでゝ寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日ごろ經にける
2/5		42	ゆけどなほ行きやられぬまいもがうむをつの浦なるきしの松原
	童	43	いのりくる風聞と思ふをあやなくに鷹さへだになみと見ゆらむ
	ある人	44	今見てぞ身をば知りぬる住のえの松よりさきにわれは經にけり
	人の母	45	住の江に船さしよせよわすれ草しるしありやとつみて行くべく
	ある人	46	ちはやぶる神のこゝろのあるゝ海に鏡を入れてかつ見つけるかな
2/6	大御	47	いつしかといふせかりつる難波がた蘆こぎそけて御船きにけり
2/7	船君	48	きときては川のほりえの水をあさみ船も我が身もなむけふかな
2/9	ある人	49	千代へたる松にはあれどいにしへの聲の寒さはかやはらざりけり
	ある人	50	君戀ひて世をふる宿のうめの花むかし香かこぞなほほひける
	昔の子の母	51	なかりしもありつゝ歸る人の子をありしもなくてくるが悲しさ
2/11	ある人	52	さざれ浪よするあやをば青柳のかげのいとして織るかぞ見る
2/16	ある人	53	ひさかたの月におひたるかつら川そこなる影もかはらざりけり
	ある人	54	あまぐものはるかなりつる桂川そでをひでゝもわたりぬるかな
	ある人	55	桂川わがこゝろにもかよはねどおなじふかさはながるべらなり
	船君	56	うまれしもかへらぬものを我がやどに小松のあるを見るがかなしき
	船君	57	見し人の松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや

和歌の発想論，つまり和歌発生の契機に注力した書としての見解を述べている。本論では，萩谷の見解に依拠し，更に，和歌の発生契機が風景の発見に及ぼす影響について論考する。

### b) 代弁者としての楫取について

『土佐日記』には，作者である紀貫之と同船する身分，関心，教養，信仰の異なる人々が登場する。その中でも，日記中の随所に登場する楫取は，ある人，ある女，船の人などの三人称で語られる他の登場人物とは一線を画し，小賢しい人物像まで描かれる。日記中に登場する楫取には，あからさまな不快感と過剰な否定が示されるが，同時に，楫取の自然認識に無関心ではいられない作者の心情を読取ることができ，ここに貫之が未開の発想があり，歌に表現できない類の風景があると推測する。

そこで，本研究では，『土佐日記』を歌論書として位置づけ，楫取と貫之の両者の対話に着目し，両者の対自然の姿勢から，和歌の発生契機を探り，歌人が歌に表現できない類の風景を探ることを目的とする。

## (3) 研究の方法

『土佐日記<sup>[1]</sup>』は，土佐，阿波，淡路，和泉の海岸線沿いに航路をとり，淀川から京に向かう船中の出来事を中心に，全行程を1日も欠かさずに書き綴られた旅日

記である。貫之と楫取の対話は海路に留まることから，本研究では，土佐から和泉までの海路に焦点をあて，両者の対話を日記中から抜き出し，日付順に論考する。なお，本論では，論考の対象としない和歌については，表-1にまとめ，適宜，表中の歌番号にて参照する。論文中の原文標記については，『國文大観<sup>3)</sup>』を定本とする。また，大まかな海路および日記中に記載される地理については図-1に示す。

### a) 貫之と楫取の対自然からの発想

紀貫之の対自然からの発想については，『土佐日記』だけでなく，『古今和歌集<sup>4)</sup>』の序文である「仮名序」および『貫之集<sup>5)</sup>』を参考に，和歌の発生の契機を探る。

楫取の言動および関心は航海に基ずくものであり，対自然観については，気象を源泉とする発想がほとんどである。従って，気象に関する辞典，観天望気，郷土資料を参考に，楫取の気象についての記述の信憑性を確かめ，楫取の関心事と自然観を類推する。

以上により，貫之の和歌的な発想と楫取の気象的な発想との比較により，両者の捉える風景を明らかにし，和歌的な発想では開拓できない風景を限界風景と仮称し，その存在を探る。

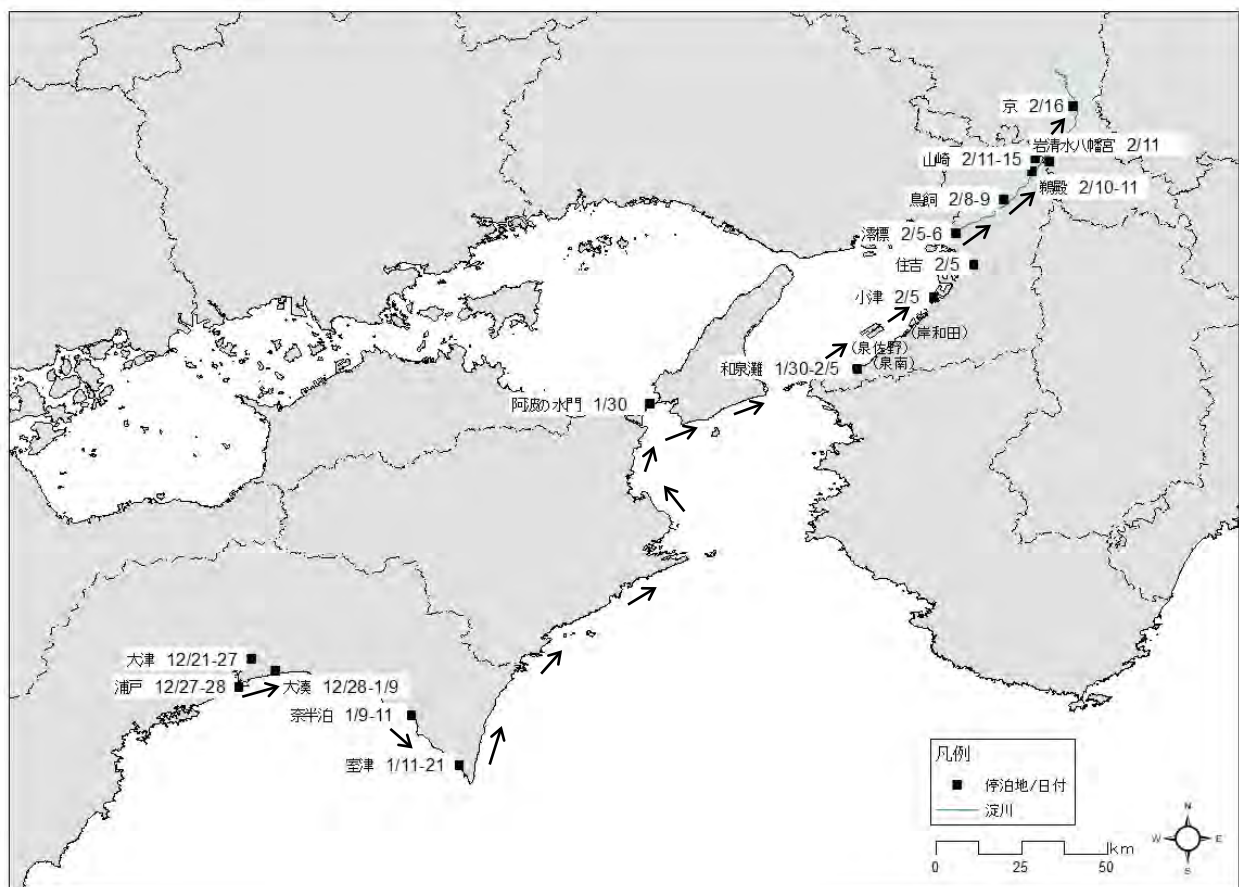


図-1 『土佐日記』に記載される停泊地および日付

## 2. 貫之と楫取の対自然からの発想

### (1) 「楫取ものゝ哀も知らで」

承平4 (893) 年12月27日大津から浦戸へ出発したものの、貫之らは、鹿児島で国司館の人々が酒などを酌み交わしながらしみじみと惜別の歌を詠じる最中、楫取が「潮満ちぬ 風も吹きぬべし」と言って出発を促すので、貫之は「楫取ものゝ哀も知らでおのれし酒をくらひつれば」と粗野な楫取を批判する。以下では、この「ものゝ哀」から和歌発生の契機を探る。

#### a) 阿波礼・安波礼について

『古事記』や『万葉集』などに表現される「あはれ」は、万葉仮名を使用し「阿(安)波礼」と表記された。『古事記』には、「やつめさす 出雲建が 佩ける太刀 黒葛さは巻き さ身無しに阿波礼<sup>9)</sup>」、『万葉集』には、「めづらしく 鳴くほととぎす(略) 聞くごとに 心つぎきて うち嘆き 安波礼の鳥と 云はぬ時なし<sup>7)</sup>」と、生、無生に関係なく阿波礼という感情が記される。

#### b) 春雨の阿波礼

また、『正倉院文書』の天平宝字6 (762) 年閏12月2日僧正美状(寧楽遺文)には、「春佐米(はるサメ)乃阿波礼<sup>8)</sup>」と記され、春雨に「阿波礼」を感じる心が記される。平安時代前期の歴史書『古語拾遺』(807年)には、天岩戸の故事からアメハレ(雨晴)の略で、「阿波礼言ハ天晴也。<sup>9)10)</sup>」とする解釈もあり、天候や気象に動かされる心を阿波礼の発生する契機とする例もある。

#### c) 楫取のものの哀れ

楫取の「潮満ちぬ 風も吹きぬべし」という言葉は、楫取が酒を酌み交わしながらも、注意深く潮の満ち引きを見極め、その後吹いてくるだろう風の予見から発想される。月齢によって変化する潮流の状況と満潮時の潮が動かない状態を見定め、出発を促す楫取の自然に対する姿勢にも「あはれ」が認められると言えるだろう。

#### d) 貫之のものゝ哀を知る心

貫之の「ものゝ哀」は、『古今和歌集<sup>11)</sup>』の序文である『仮名序』の第1節に記されるように「目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ<sup>12)</sup>」と、生きとし生けるあらゆる生物の感情形成が和歌の理念であると記される。しかしながら、日記中での「ものゝ哀」は、文芸的美的理念を前提とした哀感に留まった解釈であり、別離の優美繊細な情趣の教養への理解がない楫取を軽蔑している。

以上から、惜別の余韻に浸る貫之の心情とは別に、潮汐や天候の変化に心を動かされた楫取の言葉にも「ものゝ哀」が存在すると言える。しかしながら、日記中での和歌的な発想においては、その存在が蔑ろにされ、真に自然の移ろいに対話し、その自然に対して従順な楫取の態度が風景として発見される機会は少ないと言える。

### (2) 宇多の松原と舟歌

翌年の1月9日大湊から那波の泊りに向かう途中で宇多の松原を通り過ぎる際に、鶴が飛び交う姿が趣深く、見るに堪えず船人が詠んだ歌「見渡せば松のうれごとにする鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」(歌番号13)を聞いて、貫之は、「この歌は所を見るにえまさらず」と語り、実際の風景には到底及ばないと述べる。

また、その夜の航海では、舟歌が紹介される。以下では、平安時代に栄えた屏風歌と舟子や楫取が謡う舟歌に着目し、和歌発生の契機について述べる。

#### a) 宇多の松原の屏風歌の美意識と幻視風景

さて、上記の歌は、延喜15 (915) 年の貫之の屏風歌「わがやどの松の梢にすむ鶴は千世の雪かとおもふべらなり<sup>13)</sup>」に類似することから貫之の自作とされる<sup>14)</sup>。屏風歌とは、屏風に描かれた絵を主題として詠作された和歌であり、貫之は、屏風歌を得意とした歌人である。屏風歌の淵源は中国の画題詩にある<sup>15)</sup>。その中でも、松鶴図は中国に源流する画題で、慶賀性を示す屏風に描かれる<sup>16)</sup>。貫之の詠った屏風絵が画題の典型である「松鶴図」の一種であることが推測され、土佐の海で貫之が詠んだ歌は、この屏風絵の投影であると言える。

なお、鶴は、湿地の上に棲むため、松上に鶴がすむという表現は生態学的に矛盾する。宇多の松原で実際に目された鳥は、鶴(コウノトリ)とされることが一般的であり<sup>17)</sup>、土佐で詠まれた歌は、幻視的な風景に傾倒した歌であろう。このように、自然の風景を見ながら、歌に適した題材あるいは、模範となる画題を探すことに傾斜するあまり、実際の風景をあるがままに鑑賞できないことがある。換言すると、屏風歌と言う惰性が、和歌を自然風景からの接触を遠ざけ、和歌を融通自在に発生させる契機の抵抗になると言える。

日記中には「この歌は所を見るにえまさらず」と記されることから、貫之は、囚われた鑑賞態度と不自然な美の標準を、实景を目前ににしてようやく、自然美への認識を新鮮にすることができたと言える。

#### b) 夜の航海と舟子取の船歌

このように、船上の歌人らは、宇多の松原や鶴のような既成の景物を見ながら詠作に夢中であったが、同日に夜が更けると、西も東もわからなくなり、船客一同は、心細く、不安になる様子が日記に記される。同時に、舟子や楫取が謡う船歌が記されている。

「春の野にてぞねをばなく。わが薄にて手をきるきる、つんだる菜を、親やまほるらむ、姑やくふらむ。かへらや。よんべのうなゐもがな。ぜにこはむ。そらごとをして、おぎのりわざをして、ぜにももてこずおのれだにこず」

このような世俗的な舟歌を聞いて、笑う人があり、海は

荒るけれども心は少し風ぐと日記に記される。

暗闇の中でも夜空の星を目当てに方角を定め、俗的な舟歌を歌いながら悠々と船を漕ぐ舟子や楫取に対して、宇多の松原では、悠々と歌を詠じていた歌人たちは、夜の航海に怯え、歌さえも詠えない様子が描かれる。両者には、景物の認識、光と闇、個人と集団による発想の相違が指摘でき、また見ようとする風景の相違が顕在する。

### (3) 暁月夜と室津の雲

室津は室戸岬の西に位置する風待ち港である。一行は、悪天候のため、ここで5日間停泊してやっと1月17日に室津を出発する。日記中には、「曇れる雲なくなりて暁月夜いとおもしろければ、船を出して漕ぎ行く」と記され、貫之らが優雅に暁月夜を歌に詠じているうちに夜が明けると、楫取らは「黒き雲にはか出できぬ。風も吹きぬべし。御船返してむといひて船帰る。この間に雨降りぬ。」と言って船を引き返した際に雨が降ったことが記述される。以下では、暁月夜と黒き雲の発想に着目し、風景への関心について述べる。

#### a) 暁月夜

月の満ち欠けでは、陰暦16日頃の月は「十六夜」と呼称され、「暁月夜」とされる暁に月が残る様は、歌の発生にふさわしい月光と影を落とし、ここでは2首の歌（歌番号19,20）が詠じられる。暁月夜や十三夜のような古来歌に詠われる月夜については、日記中に「おもしろし」などと特筆される。どれも歌言葉としての使用が認められ、また「いさよふ」に関して言えば、万葉時代には、雲や浪についても詠ったが、次第に月についてのみの形容となり<sup>18)</sup>、「いざよいの月」が定着した。このように月夜からの発想にも一種の惰性が見られる。

#### b) 室津の雲

一方、高知県安芸地区には、「室戸岬沖が雲で暗くなったら雨が降ってくる<sup>19)</sup>」という観天望気があり、楫取らがかすかな風雲の気色の変化を認識し、自然に対し非常に従順な態度を示していることが理解できる。

両者は、同船しながらも、一方は、雲がなくなった暁月夜を詠じ、一方は、急な黒雲の出現を警戒するという関心の相違がある。また、土佐日記に登場する楫取の言動が荒唐無稽の作り話でないと言える。

### (4) 「黒鳥のもとに白き浪を寄す」

悪天候がつづき、1月21日によりやく室津から船出した時に、黒鳥という鳥が岩の上に集まり、その岩のもとに浪が白く打ち寄せている風景を貫之が見ている時に、楫取の発した何気ない言葉「黒鳥のもとに白き浪を寄す」が、まるで詩歌のように聞こえるが、貫之は、身分に相応しくないと咎める。そして、最後に、「楫取、い

へ」と言って返歌を求める苛立ちさえ日記に記されている。ここには、歌人、貫之が捉えることのできない類の風景が示されている。

以下では、再度、「仮名序」に立ち戻り論考を進める。仮名序の冒頭文には「和歌は、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。<sup>20)</sup>」と記され、和歌発生の契機が述べられている。以下では、楫取の「心の種」と言う観点から、両者の風景発見への過程を探る。

#### a) 楫取の「心の種」

楫取の心の源、つまり心の種は安全な航海であり、これには自然との深い交渉が必要である。楫取の「黒鳥」は、一般的に（海）鵜と解釈される<sup>21)</sup>。高知県高岡郡中土佐町には、「鵜のハイ」という礁を指す言葉があり、海上面に出ている礁を「ハイ」と呼ぶ。鵜のハイは、干潮のとき鵜がよく集まったことによる命名である<sup>22)</sup>。つまり、楫取は、磯浪を見て、水面下の岩礁を予見し、船が浅瀬に乗り上げないように細心の注意を払い、更には他の船乗りにも岩礁の位置を色の明暗によってわかりやすく伝達する気魄がある。このように、楫取の発する言葉には、自然との身体的な深い交渉による心の種があり、その言葉には、貫之が開拓できない生命感が含まれる。

#### b) 貫之の「心の種」

貫之は、同じ風景を目前にしながらも、楫取の発した言葉によって、ようやく鳥と浪の静動、あるいは黒と白の濃淡に気づかされる。そして、さながら水墨画のような美を意識し、楫取に「身分に相応しくない」と指摘する。上記の身分に関して言えば、貫之は、文化人であり、知識人であり、歌の素養がある。一方で、楫取は、彼にとつての必要な文化、つまり、自然との深い接触から養った航海に関する広い素養を備えている。この異なる質の素養が風景発見の過程に相違をもたらす、自然との身体的な交渉のない美的な関心では捉えることのできない風景の類を生じさせると言える。

### (5) ちぶりの神と追風

1月25日、楫取らは、北風が悪いと言って、出航せず、次の日の26日は、貫之が海賊を恐れ、夜に船を出した。その途中、道に手向けする場所で、楫取に手向けの紙に幣を奉らせたところ、幣が東へ散ったので、楫取が、「この幣のちるかたにみふね速にこがしめ給へ」と言う。これを聞いてある女の童が、

「わたつみのちぶりの神にたむけするぬさのおひ風やま  
ずふかなむ」（歌番号26）

と詠む。この間に風向きが良いので楫取が大変喜んで、船に帆あげなどして喜ぶと日記に記される。

貫之一行は、17日に室津を出発し、29日に土佐の泊り、30日に阿波の水門（鳴門海峡）を渡る間のはっきりとし

たな地名記載がないため、その間のどこかの泊りに停泊し、航行している(図-1)。阿波の水門までは北東方向へ航路であるので、楫取は、海神の信仰には関心を示さないが、純粹に西風を追風として進みたいところ、運よく東に幣が散ったので、西風を歓迎する様子が示される。

#### (6) 「けふ風雲のけしきはなはだあし」

2月4日、和泉の灘で楫取は「けふ風雲のけしきはなはだあし」と言って出航しなかったことに対し、貫之は「然れどもひねもすに浪風たゞず。この取は日も得計らぬかたみなりけり。」と言って波風も立たないことから、楫取が天候も予測できない者として罵る。

一行は、この時、現在の泉南、泉佐野、岸和田近くに停泊している(図-1)。この周辺では、冬に吹く強風を「ヤマゼ」と呼ぶ。泉南では、「強い西風の前ぶれで11月～2月に多く吹く<sup>23)</sup>」とされる。高知県でも同様に「冬のヤマゼはニシとなる<sup>24)</sup>」という俗語があり、ニシと呼ばれる西風は恐れられている。また、ヤマゼは陸から沖へ払い出すように吹く強い風のため、沖に出ることは可能であるが、帰ることができない風とされる<sup>25)</sup>。加えて「海はしけるが、天気よし<sup>26)</sup>」と言われ、晴天の風とされる。高知県土佐清水地区では、「マデのしわ吹きコチとなる」という観天望気があり、しつこく吹く風で、翌日天気になってもすぐに東風で崩れる風として知られる。

貫之にとっては、出航に良い天候の見えたが、楫取は、ヤマゼのような突風の西風を予見し、出航を見合わせた可能性がある。ここでも、楫取の言動には信憑性が認められ、貫之の作話ではないと言える。また、貫之にとっては、無知に見える楫取であるが、日和見に優れていることがわかる。

#### (7) 朝の北風と三十一文字の形式美

次の日の2月5日和泉の灘から小津の港に向かう途中に、天気が良いので、船君(貫之)が船を早く漕ぐように催すと楫取が無意識に発した言葉「朝北の出で来ぬさきに綱手はや引け」が歌のようだと、聞いた人が書き出すと「三十一文字あまりなりけり」であった。

##### a) 「朝北の出で来ぬさきに綱手はや引け」

貫之は、天気が良いので船を早く漕ぐように催促するが、楫取は綱手を引くように指示する。綱手とは、船をつないで引く綱であり、貫之の意に反して、楫取は、船を固定するように誘導し、朝北、つまり朝の北風を警戒していることがわかる。一行は、和泉の灘から小津に向かう途中であったから、南風を追風にしていたと言える。和泉佐野地区では、「ながヤマゼ、大北のもと<sup>27)</sup>」、岸和田地区では、「ヤマゼ返しの西が怖い<sup>28)</sup>」とし、ヤマ

ゼ(南風)が吹いた後に、風が強い北西に変わり危険であるという観天望気がある。このような風に注意する楫取は、船君が船を早く漕ぐように指示されても、綱手を引くように指示し、朝の北風に対し周到に備えている。

##### b) 「三十一文字」の形式美

一方、貫之らは、楫取の真意には関心を示さず、三十一文字の形式美に囚われ、楫取の純正な言葉の選択や、自然に対する写実性を失っていることに無自覚である。

「仮名序」の第2節は、和歌の発生と三十一文字の短歌の発生についての記述であり、「ちはやぶる神世には歌の文字も定まらず。素直にして言の心分きがたたかりけらし<sup>29)</sup>」と記される。上記は、神代、つまり昔の歌は、形式が定まらず、素朴で分りにくいと言う意味であるが、本来の歌の発生と言える。日記中には、楫取の発した生のままの言葉の真意はほとんど理解されず、形式美に囚われた歌人たちが描かれる。

#### (8) 住吉の明神

2月5日、小津の港に向かう途中順風だったのが思いがけなく強い風になって、漕いでも前に進まず、危なく船が沈んでしまいそうな時に、楫取は、この住吉の明神は普通の神で欲しいものがあると言い、楫取が、「幣をたてまつり給へ」と言うに従って幣を奉ったが、風がやまないで、また楫取が「幣には御心のいかねば御船も行かぬなり。猶うれしと思ひたぶべき物たいまつりたべ」と言う。またも言うに従って「いかゞはせむ」として「眼もこそ二つあれ。ただ一つある鏡をたいまつる」と言って大切な鏡を海に投げ入れた瞬間に風が止んだところ、ある人が「ちはやぶる神のこゝろのあるへ海に鏡を入れてかつ見つるかな」(歌番号46)と詠む。

貫之は、和歌の世界の「住の江の忘草、岸の姫松などいふ神」ではなく、はっきりと鏡に神の心を見たと言え、それは、楫取の心は神の御心であったと述べる。

##### a) 和歌の神

ここでは、貫之の信仰する雅な神と楫取の思考する俗な神が描かれる。大阪湾に臨む一帯は「住の江」と呼ばれ、歌の神、航海守護の神として信仰される住吉大社が鎮座する。貫之は当然歌に詠まれる雅な歌の神を厚く信仰し、その加護を期待していたであろうことが容易に推測できる。

##### b) 楫取の心

これまで、厚い信仰心を示さなかった楫取にとっては、やはりその関心は天候にあると言える。ここでは、思いがけない強風に出会うが、岸和田や堺地区には、「ニッパチ(2月、8月)頃、淡路島に黒い雲がかかったら天気が急に崩れるが、雨風はすぐおさまる<sup>30)</sup>」という観天望気があるように、楫取が短時間で雨風が止むことをある

程度予期していた可能性は否めない。

### c) 「取の心は神の御心なりけり」

また、漁船や航海の安全を守る神は一般に「船霊」と呼ばれ、全国的に見られる漁村信仰がある。土佐でも船霊信仰は厚く、船霊は女性神であり、金属を嫌うとされる<sup>31)</sup>。海上の禁忌には、「刃物や金属類を海中に落とすてはいけない<sup>32)</sup>」という俗信が土佐だけでなく日本各地にみられるように、楫取が貫之に鏡を投げ入れるように進言することは考え難いが、日記中に記されるように、鏡は間違いなく貫之にとって貴重品であった。これは、実生活だけでなく和歌を表現する観点においても重要な素材であった。日記中の歌（歌番号19と20）を含め、貫之の歌には、「水」や「水底」に映るものを主題として詠った歌が多く、間接的に風景や物事を見る鏡像的表現を愛好した<sup>33)</sup>。このように考えると海に投げ入れた鏡に映った神の心と言う表現は、いかにも貫之らしい文芸的表現であり、また意味深長である。「取の心は神の御心なりけり」と言う表現は、単純に、俗な神であったとするのが通説であるが、深読みすると、貫之が歌の神と思っていた神は、実は、航海守護の神であり、その御心は、まさに天候の変化を見通していた楫取の心、あるいは、歌の神である場合でも、楫取のように自然を見る心の重要性を論ずるものであったと解釈することもできる。

## 3. まとめ

本研究では、『土佐日記』を一種の歌論書として位置づけ、楫取と貫之の両者の対話に着目し、両者の対自然の姿勢から、和歌発生の契機を明らかにし、歌人が歌に表現できない類の風景を探った。

その結果、和歌の発生契機としては、「ものの哀れ」を代表とする文芸的美的理念を前提とする発想、屏風歌を例に、松や鶴など歌に適した題材あるいは、模範となる画題からの発想、暁月夜などの歌言葉、三十一文字などの形式美は、日本の風景美を語る上で特筆すべき価値観であると言える。

一方で、本論では、楫取と貫之の対話に着目し、両者の対自然の姿勢により、以上のような和歌的な関心から見落とされた無名の風景の存在を明らかにした。その結果、自然との深い身体的交渉から得ることのできる風景の類があると言え、これは、美に傾倒した知的な関心では捉えることのできない風景であると言える。

従って、日本の風景を語る上で、和歌は、依然として自然風景の存在を発見し、表現するためのひとつの拠り所である。しかしながら、風景(Landscape)が有する美的価値への傾斜や様式化した価値判断は、風景に潜在す

る他の価値を発見する際の融通自在性の抵抗となることがあり、風景を発見することの限界となる。これを認識した上で風景の存在を語る事が重要であると言えよう。

## 註釈

[1] 『土佐日記』については、以下を主要な参考書籍とする。

- 丸岡桂, 松下大三郎編: 國文大観(日記草子部), 板倉屋書房, 1903.  
紀貫之, 品川和子(訳注): 土佐日記, 講談社, 1983.  
紀貫之, 知鈴木太郎(校注): 土佐日記, 岩波書店, 1979.

## 参考文献

- 1) 正岡子規: 歌よみに与ふる書, 改版, 岩波書店, 1983.
- 2) 日本文学研究資料刊行会編: 土佐日記・蜻蛉日記「土佐日記は歌論書か」, pp. 54-63, 有精堂出版, 1971.
- 3) 丸岡桂, 松下大三郎編: 國文大観(日記草子部). 板倉屋書房, 1903
- 4) 片桐洋一: 古今和歌集全評釈, 講談社, 2019
- 5) 紀貫之, 田中登(校訂): 校訂貫之集, 和泉書院, 1987.
- 6) 次田真幸: 古事記(中), p.143, 講談社, 1977.
- 7) 中西進: 万葉集(四), pp.167-168 (大伴家持: 4089), 講談社, 1978.
- 8) 竹内理三, 辻善之助, 久松潜一編: 寧樂遺文(訂正版), p. 954, 東京堂, 1962.
- 9) 群書類従, 第二十五輯雑部, p.4
- 10) 斎部広成, 西宮一民: 古語拾遺, p.22, 岩波書店, 1985
- 11) 佐伯梅友(校注): 古今和歌集, 岩波書店, 1981.
- 12) 前掲書『古今和歌集全評釈』, p.95
- 13) 前掲書『校訂貫之集』, p.57
- 14) 前掲書『土佐日記』, p.96
- 15) 田島智子: 屏風歌の研究(論考編), Vol. 363. 研究叢書, p.6, 和泉書院, 2007.
- 16) 前掲書『屏風歌の研究』, p.298
- 17) 紀貫之, 品川和子(訳注): 土佐日記, p.96, 講談社, 1983.
- 18) 片桐洋一: 歌枕歌ことば辞典(増訂版), pp.47-48, 笠間書院, 1999.
- 19) 関西小型船安全協会: 気象に関する豆知識と観天望気, p.30, 日本財団, <http://nipponzaidan.info/seikabutsu/200201172/images/030L.jpg> (参照 2020-08-27)
- 20) 前掲書『古今和歌集』, p.9
- 21) 前掲書『土佐日記』, pp.161-162
- 22) 「土佐のカツオ漁業史」編纂事務局: 土佐のカツオ漁業史, pp.583-585, 高知県中土佐町, 2001.
- 23) 関口武: 風の事典, p.921, 原書房, 1985,
- 24) 前掲書『風の事典』, p.922
- 25) 前掲書『土佐のカツオ漁業史』, p.576
- 26) 前掲書『風の事典』, p.921
- 27) 前掲書『気象に関する豆知識と観天望気』 <https://nipponzaidan.info/seikabutsu/200201172/images/010L.jpg> (参照 2020-08-27)
- 28) 前掲書『気象に関する豆知識と観天望気』 <https://nipponzaidan.info/seikabutsu/200201172/images/009L.jpg> (参照 2020-08-27)
- 29) 前掲書『古今和歌集全評釈』, p.108
- 30) 前掲書『気象に関する豆知識と観天望気』 <https://nipponzaidan.info/seikabutsu/200201172/images/009L.jpg> (参照 2020-08-27)
- 31) 前掲書『土佐のカツオ漁業史』, p.557
- 32) 前掲書『土佐のカツオ漁業史』, p.571
- 33) 大岡信: 紀貫之, 筑摩書房, 2018.